

読売俳壇

矢島 渚男 選

明日もまた過ぎてゆくもの鳥の恋

加須市 萩原 康吉

【評】季節の変わり目は落ち着かず、時間ばかりが空しく去ってゆく感じがする。この句、鳥の恋のように結実することもある季語を合わせることで無力感を出している。

メーデーの叫びに生まれ九十四

成田市 神郡 一成

【評】年々メーデーは静かで稀に目にするだけの行事に変わってきたようだ。それに人間というもの。だんだんに旗の下で行動させられることに倦きるものなんでしょうが。

輝いてツツンと顎を出す細魚

京都市 足立 紀子

【評】なるほどサヨリは顎が長いんですね。面白い見方だ。ツツンが良いんですね。

涼しさのぶつかうとんやや硬し

東京都 森 一平

夏めくや朝飯前のひと仕事

柏市 小畑 昌司

妻が行く花の同窓会日和

神戸市 倉本 勉

笑み返す病室の母白椿

奈良市 井之川健児

渋滞の車内のラジオ夏来たる

上尾市 山口 流離

世のことは思案に余り花は葉に

神奈川県 中島やさか

良き記憶のみをあしたへ花木

高知市 加田 紗智

高野ムツオ 選

森涼し一樹一樹の風の楽

香川県 福家 市子

【評】「森涼し」の断定がまず心地よい。次々湧き起る風が木々それぞれに異なる葉音を生み、全体でシンフォニーを奏で出す。森一つが爽快なオーケストラなのだ。

軒へ飛ぶ雀の羽音朝ぐもり

川越市 大野有之介

【評】物音か人影か、何かに驚いて雀が軒先へ隠れた。一瞬の光景だが、小動物にとっても厳しい暑い夏の一日の始まりが捉えられている。

玉子かけご飯三杯夏来る

宇都宮市 津布久 勇

【評】玉子の生食は海外にもあるようだが、玉子かけご飯は日本ならではの習慣だろう。戦後、普及した庶民の味だ。今夏も三杯飯で頑張る。

噴水やまた腕時計見ておりぬ

明石市 北前 波塔

ストローが麦藁なりし頃の恋

白井市 昆舎利愛子

釣堀や水面に揺れる摩天楼

志木市 谷村 康志

ただ単に好きと言いたし夏の雲

金沢市 山本 健夫

裂かれても水鳶くねる力かな

京田辺市 加藤 草児

帆柱の百の傾き夏盛ん

神戸市 山口 誠

薔薇の花大河の流れ雲流れ

茨木市 宮崎 経大

正木ゆう子 選

へくそかつら何とかわいいわいと花

神戸市 吉野 勝子

【評】屁糞ととは随分な名前だが、花は小さく可愛らしく、真ん中が赤いので、火を点けた灸に因んで別名を灸花という。二つの名前を詠み込んで、なんと自由な句だろう。

失念の名は初夏のアガパンサス

さいたま市 関根 道豊

【評】よく見かけるのに、その名を私もなかなか覚えられなかった。昔はあまり見なかった気がする。遅しいらしく、なぜかうちの庭にも咲くファンファレー待つ薫風の返し馬

川崎市 沼田 広美

【評】返し馬とは、馬場に入った馬が発走地点まで軽く走ること。多くを語らず、「薫風」から、三歳馬の走る日本ダービーを想像させる。

ぎざぎざでさらさら円空仏涼し

東京都 望月 清彦

しっかりと怒る先生夏の園

那覇市 上江洲一石

両隣同じ花咲く初夏来たる

鎌倉市 中江 優子

桑の実と木苺腹の子熊かな

津市 中山 道春

仏前へバイク雑誌とバナナ帽

東京都 松永 京子

雄鶏と朝を競って草刈りに

高崎市 桜井 寛

金雀枝や昔この家に三姉妹

柏市 藤嶋 務

小澤 實 選

週刊誌録す飛翔の油虫

名古屋市 可知 豊親

【評】気温の高い夜、油虫、こきぶりは飛翔する。これを丸めた週刊誌を振り回して、果敢にも落とそうとしているわけだ。しかし、油虫の方が一枚上だったようだ。

ひん曲ることのうれしき胡瓜かな

北本市 萩原 行博

【評】世には、まっすぐのきゅうりばかりが、売られているが、自然のままにしておくと、ひん曲がつてしまふ。このきゅうり楽しそう。

芍薬の歪む大正硝子窓

武蔵野市 相坂 康

【評】大正期に建てられた御屋敷の廊下から、庭園の芍薬が見える。窓の硝子も大正以来のもので、芍薬は歪んで、さらに豊かに見えている。

蜘蛛の罫に尻のいくつ不穩の世

東京都 奥村 和子

烏賊刺と猪口一ぱいと今日の幸

狭山市 富沢 証江

たんぼぼの草笛ならす年の功

東京都 森下 千義

ガリ版のクラス文集曝しけり

八王子市 徳永 松雄

夏空にケバブ滴るキッチンカー

横浜市 岡 まゆみ

うどん屋の水荒使ひ夏タベ

神奈川県 新井たか志

神輿見る席は床屋の椅子回し

芦屋市 田中 俊

出合い

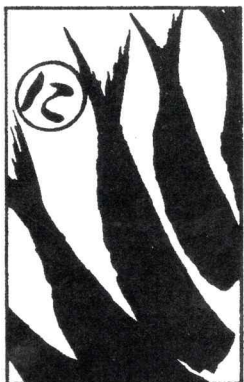
短歌あれこれ 錦見映理子（歌人）

短歌を作るようになって約三十年になる。今と違って、当時は書店に歌集がほとんどなかった。カルチャー講座に行っても祖父母世代の方ばかりで溶け込めず、どの結社に入ればいいのかもわからなかった。

黙々と短歌雑誌に投稿するだけの日々、私は思いがけない場所、同世代の歌人達に一気に出会うことになった。

パソコンの中。今なら普通のことだろうが、当時はSNSもスマホもない。私は買ったばかりのパソコンで見つけた、歌人の掲示板に恐る恐る記入し、初めて短歌を書く人達と言葉を交わしたのである。

立つわたし、いきなり語り出すわたし、ウルルアルタイ語圏のわたし、田中樅『ギャザー』そのようにして知り合った田中樅さんに誘われて、私はいきなり岡井隆さん主宰の超結社の歌会に参加した。歌人と呼ばれる人達に会ったのは、それがほぼ初めてのことだった。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭